

〔論文〕

「道理でpと思った」は何を納得しているのか

齊藤 学

— 目 次 —

1. はじめに
2. 二種のドウリデpトオモッタ文の特徴
 - 2.1. 【通常の納得用法】の特徴
 - 2.2. 【誤解に基づく納得用法】の特徴
 - 2.3. 【通常の納得用法】と【誤解に基づく納得用法】の共通点と相違点
 - 2.3.1. 【通常の納得用法】と【誤解に基づく納得用法】の共通点
 - 2.3.2. 【通常の納得用法】と【誤解に基づく納得用法】の相違点
3. ドウリデpトオモッタの構造と意味
 - 3.1. ドウリデpトオモッタの構造
 - 3.2. ドウリデpトオモッタの意味
4. ドウリデpトオモッタの意味と二用法
 - 4.1. 【通常の納得用法】
 - 4.2. 【誤解に基づく納得用法】
5. まとめと今後の課題

キーワード：納得、副詞、道理で、矛盾、認識

1. はじめに

本論文では、(1)のように副詞「道理で」(以下、ドウリデ)が「と思った」(以下、トオモッタ)を伴った文(以下、ドウリデpトオモッタ文)を分析対象とし、当該文の意味を明らかにすることを目的とする。

- (1) (料理べたな娘が作ったと思った料理が意外にもおいしく不思議だと思っていたところ、実はその料理は一流シェフが作ったものであることがわかったという状況で) ドウリデうまいトオモッタ。

ドウリデpトオモッタ文は納得を表すとされるが、以下に見るように、トオモッタをワケダやハズダと言い換えても同様の意味を表せる場合が多い。⁽¹⁾

- (2) ((1)と同じ状況で) ドウリデうまい {ワケダ、ハズダ}。

しかし、(3)のような状況では言い換えができない。⁽²⁾

- (3) (以前A口座に100,000円入金したにもかかわらず通帳を見ると1,000円と書いてあり不思議に思っていたところ、実は見ていた通帳がB口座のものであり、A口座の通帳には100,000円と書かれていることがわかったという状況で) ドウリデA口座に1,000円しかないトオモッタ。

- (4) ((3)と同じ状況で)

- a. ??ドウリデA口座に1,000円しかない {ワケダ、ハズダ}。
b. ??ドウリデA口座に1,000円しかなかった {ワケダ、ハズダ}。

(3)の意味を考えてみるとこれも納得を表していると言えそうである。では、なぜ(3)は不自然になるのだろうか。(1)と(3)では何が違うのだろうか。これらをよく観察すると、(1)のpの部分は事実であるが(3)のpの部分は事実でないことがわかる。以下を見られたい。

(5) ((1)と同じ状況で)

ドウリデうまいトオモッタ。実際、本当にうまかった。

(6) ((3)と同じ状況で)

ドウリデA口座に1,000円しかないトオモッタ。でも、実際にはA口座に100,000円あってよかった。

(5)では「実際、本当にうまかった」と続けられていることから、話者はpを事実として把握していると言えるだろう。一方、(6)では「実際にはA口座に100,000円あってよかった」と続けられていることから、話者はpを事実ではないと把握していると言える。

ところで、(1)も(3)も納得を表していることは既に述べたが、ここで一つ疑問が生じてくる。事実を納得するというのはよくわかる。なぜなら、ある事実を知り、最初は理由がわからなかったが後に理由がわかったというということはある得るからである。しかし、事実でないことを納得するというのはどういうことだろうか。そもそも、事実でないことを納得することなどできるのであろうか。⁽³⁾本論文では、ドウリデpトオモッタ文は、事実pや非事実pに納得したことを表す文ではなく、pと正しく思ったこととpと誤って思ったことに納得したことを表す文であると主張する。つまり、ドウリデpトオモッタ文自体はpと思った理由が過去には明らかでなかったが、発話時には明らかになったことを表しており、pと思ったことを事実として捉えると(1)のような使い方となり、非事実として捉えると(3)のような使い方になると考えるわけである。

以下では、まず、第2節で上述の2種類のドウリデpトオモッタ文のそれぞれの特徴を詳しく見る。続く第3節では、ドウリデpトオモッタ文が構成性の原理に従い全体としてどのような意味を持つのかについての本論文の提案を行う。そして、第4節で、第3節で提案されたドウリデpトオモッタの意味が第2節で取り上げられた諸特徴をうまく説明できることを示す。第5節では、まとめと今後の課題について述べる。

2. 二種のドウリデpトオモッタ文の特徴

本節では、ドウリデpトオモッタ文が発話された時に発話者の思考内でどのようなことが行われているかを、【通常の納得用法】と【誤解に基づく納得用法】に分けてを詳しく観察し、これらの共通特徴と相違特徴を抽出する。

2.1. 【通常の納得用法】の特徴

以下に、(1)を再掲する。

- (1) (料理べたな娘が作ったと思った料理が意外にもおいしく不思議だと思っていたところ、実はその料理は一流シェフが作ったものであることがわかったという状況で) ドウリデうまいトオモッタ。

まず、(1)のドウリデpトオモッタ文は、実際にうまいと認識した時点（以下、認識時）に(7)を満たしていなければならない。

(7) ⁽⁴⁾ <認識時に(1)が満たしていなければならないこと>

- a. 話者が直接体験し（すなわち料理を実際に食べ）て、「料理がうまい」と思う。
- b. 認識時の話者の既存知識 ⁽⁵⁾（すなわち「娘が作った」という知識）からは、(7a)と矛盾する内容（すなわち「料理がうまいと思わない」こと）が予測される。

これは、もし(7)のどちらかが満たされていない場合、(8)で見るように(1)のドウリデpトオモッタ文の使用は不自然になることから明らかである。

- (8) a. (認識時に話者が「料理がうまい」と思わなかった状況で) ??ドウリデうまいトオモッタ。
- b. (認識時に料理を誰が作ったかわからない等、「料理がうまいと思わない」ことが予測されない状況で) ??ドウリデうまいトオモッタ。

また、発話時には次を満たしていなければならない。

(9)＜発話時に(1)が満たしていなければならないこと＞

(7b)の既存知識（すなわち「娘が作った」という知識）に思い違いがあったことに気づき、「料理がうまいと思った」を予測させる新規情報（すなわち「一流シェフが当該料理を作った」等）を持つ。

(10)で見るように、もし発話時に(9)のような新規情報を話者が得ていなければ、(1)のドウリデpトオモッタ文の使用は不自然になる。

(10)（「一流シェフが当該料理を作った」等の新規情報がなかった状況で）?? ドウリデうまいトオモッタ。

以上のことから、ドウリデpトオモッタ文の通常納得用法は、以下の特徴を持つとまとめられる。

(11)＜ドウリデpトオモッタ文の通常納得用法の特徴＞

- a. 認識時の特徴1：話者が直接体験して、pと思う。
- b. 認識時の特徴2：認識時の話者の既存知識からは、「→（pと思う）」が予測される。
- c. 発話時の特徴：(11b)の既存知識に思い違いがあったことに気づき、「pと思った」を予測させる新規情報を持つ。

つまり、ドウリデpトオモッタ文の通常納得用法は、話者の思考内で次のようなことが起きているというわけである。

(12) 話者の直接体験から得られた思いは、既存知識から得られる思いと認識時には矛盾していたが、それは既存知識に思い違いがあったためであり、新規情報により既存知識が修正された発話時には、認識時にあった矛盾が解

消された。

2.2. 【誤解に基づく納得用法】の特徴

次に【誤解に基づく納得用法】の特徴について考える。以下に、(3)を再掲する。

(3) (以前A口座に100,000円入金したにもかかわらず通帳を見ると1,000円と書いてあり不思議に思っていたところ、実は見ていた通帳がB口座のものであり、A口座の通帳には100,000円と書かれていることがわかったという状況で) ドウリデA口座に1,000円しかないトオモッタ。

(3)のドウリデトオモッタ文は、認識時に以下を満たしていなければならない。

(13) <認識時に(3)が満たしていなければならないこと>

- a. 話者が直接体験していると思いをし(すなわち「残高が1,000円である」と記帳されたB口座の通帳をA口座の通帳だと誤解し)て、「A口座に1,000円しかない」と思う。
- b. 認識時の話者の既存知識(すなわち「A口座に100,000円入れた」という知識)からは、(13a)と矛盾する内容(すなわち「A口座に1,000円しかない」と思わないこと)が予測される。

もし、(13)のどちらかが満たされない場合、(14)に見るように(3)のドウリデトオモッタ文の使用は不自然になる。

- (14) a. (認識時には実際にA口座の通帳残高が1000円と記載されていてA口座の通帳を見ていた等の状況で)
??ドウリデA口座に1,000円しかないトオモッタ。
- b. (認識時にA口座に1,000円しかないと思わないことが予測されない状況で) ??ドウリデA口座に1,000円しかないトオモッタ。

また、発話時に次のような新規情報を話者は得ていなければならない。

(15) <発話時に(3)が満たしていなければならないこと>

「実際にはB口座の通帳を見ていた」等、(13a)で直接体験したと認識時に思い違いしていた（すなわち、A通帳を見たと思ったが実際はその通帳がB通帳であった）ことに気づき、A口座に1,000円しかないと思ったことが誤解であったことをわからせる新規情報を話者が持つ。

(16)で見ると、もし発話時に(15)のような新規情報を話者が得ていなければ、(3)のドウリデpトオモッタ文の使用は不自然になる。

(16)（「実は見ていた通帳がB口座のものであり、A口座の通帳には100,000円と書かれていることがわかった」等の新規情報がなかった状態で）

?? ドウリデA口座に1,000円しかないトオモッタ。

以上のことから、ドウリデpトオモッタ文の【誤解に基づく納得用法】は、以下の特徴を持つと言えそうである。

(17) <ドウリデpトオモッタ文の【誤解に基づく納得用法】の特徴>

- a. 認識時の特徴1：話者が認識時に直接体験していると思い違いをして「pと思う」。
- b. 認識時の特徴2：認識時の既存知識からは、「←（pと思う）」が予測される。
- c. 発話時の特徴：(17a)の直接体験に思い違いがあったことに気づき、「pと思った」を予測させる新規情報を持つ。

つまり、ドウリデpトオモッタ文の【誤解に基づく納得用法】は、話者の思考内で次のようなことが起きているというわけである。

(18) 話者の直接体験から得られたと思い込んでいた思いは、既存知識から得ら

れる思いと認識時には矛盾していたが、それは直接体験していたと思違いをしていたためであり、新規情報により実は直接体験をしていなかったことが明らかになった発話時には、当該の思いの内容が誤っていたことがわかり、かつ誤りの理由もわかり、認識時にあった矛盾が解消された。

2.3. 【通常の納得用法】と【誤解に基づく納得用法】の共通点と相違点

以下では、【通常の納得用法】と【誤解に基づく納得用法】の特徴の共通点と相違点をまとめる。

2.3.1. 【通常の納得用法】と【誤解に基づく納得用法】の共通点

認識時の共通点は(19)のようにまとめられる。

(19)＜認識時の共通点＞

- a. 話者の直接体験（話者の思い違いがある場合も含む）から「pと思う」。
- b. 認識時の既存知識（一部話者の思い違いがある場合も含む）から「→ (pと思う)」が予測される。

また、発話時においても共通点がある。これは(20)のようにまとめられる。

(20)＜発話時の共通点＞

発話時に得られた新規情報により、認識時に何らかの思い違いがあったことがわかる。

つまり、認識時には話者の思いに矛盾があり、その矛盾の原因が発話時に新規情報から得られることが共通しているわけである。

2.3.2. 【通常の納得用法】と【誤解に基づく納得用法】の相違点

相違点は認識時にはなく、発話時にだけある。発話時の相違点は(21)のようにまとめられる。

(21)〈発話時の相違点〉

- a. 【誤解に基づく納得用法】は【通常の納得用法】と異なり、認識時に直接体験していたと思っていたことが思い違いであったことがわかる。
- b. 【通常の納得用法】は【誤解に基づく納得用法】と異なり、認識時の既存知識に思い違いがあったことがわかる。

つまり、認識時の思い違いが「pと思わせる」ところにあったか、「pと思わせる」ところにあったかのかが相違しているわけである。

3. ドウリデpトオモッタの構造と意味

前節では二種のドウリデpトオモッタ文の諸特徴を抽出した。本節では、ドウリデ、p、トオモッタの三要素からこれらの諸特徴が導き出される論理を明らかにする。本論文では、ドウリデpトオモッタ文の意味は構成性の原理に従って得られると考える。以下では、この文の構造、及びこの文を構成する三要素、すなわちドウリデ、p、トオモッタ、それぞれの意味に対する本論文の主張を記す。

3. 1. ドウリデpトオモッタの構造

本論文では、ドウリデpトオモッタ文は以下のような構造を有すると仮定する。

(22) [[ドウリデ][p][トオモッタ]]

pの部分は田窪1989のB2（事実）相当の事柄と考える。このpとトオモッタがまず合成され、その後にドウリデと合成され、全体の意味が決定されると考える。⁽⁶⁾

3. 2. ドウリデpトオモッタの意味

上記の仮定に従うとまずpとトオモッタの意味が合成されることになることから、まず、pトオモッタの意味について考えたい。本論文ではpトオモッタの意味を次のように考えたい。

(23) <pトオモッタの意味>

pと（話者が過去に）認識した⁽⁷⁾

また、ドウリデXは次のような意味を持つと考える。

(24) <ドウリデXの意味>

現実世界に対する話者の発話時の認識において、事実Xが他の関連する事実群（新規情報により修正された事実を含む）と整合的だ⁽⁸⁾。

従って、(23)と(24)からドウリデpトオモッタの意味は以下のようになる。

(25) <ドウリデpトオモッタ>の意味

現実世界に対する話者の発話時の認識において、「pと（話者が過去に）認識した」という事実が他の関連する事実群（新規情報により修正された事実を含む）と整合的だ。

また、(25)は以下の会話の含意を持っていると考えることが可能である。

(26) <ドウリデpトオモッタ>の会話の含意

現実世界に対する話者の認識時の認識において、「pと（話者が過去に）認識した」という事実が他の関連する事実群（新規情報により修正される前の既存知識）と整合的でなかった。

次節では(25)が第2節で見たドウリデpトオモッタの二用法の特徴をうまく説明できることを示す。

4. ドウリデpトオモッタの意味と二用法

本節では、ドウリデpトオモッタ文に対する前節のような捉え方が、【通常の納得用法】も【誤解に基づく納得用法】も共にうまく説明できることを示す。

4. 1. 【通常の納得用法】

(1)と(25)を再掲する。

- (1) (料理べたな娘が作ったと思った料理が意外にもおいしく不思議だと思っていたところ、実はその料理は一流シェフが作ったものであることがわかったという状況で)

ドウリデうまいトオモッタ。

- (25) <ドウリデpトオモッタ>の意味

現実世界に対する話者の発話時の認識において、「pと（話者が過去に）認識した」という事実が他の関連する事実群（新規情報により修正された事実を含む）と整合的だ。

- (1)において、(25)内の「pと（話者が過去に）認識した」という事実は(27)になる。

- (27) <(1)の「pと（話者が過去に）認識した」という事実>

認識時に食べた料理がうまいと（話者が過去に）認識した

また、新規情報が「一流シェフが当該の料理を作った」であることから、他の関連する事実群は例えば(28)のようなものになるだろう。

- (28) <(1)の発話時における他の関連する事実群>

- a. [新規情報より]一流シェフが当該の料理を作った
- b. [既存知識より]一流シェフがある料理を作ればその料理はうまい
- c. [既存知識より]うまい料理を食べた人はその料理がうまいと認識する

従って、(27)が(28)と整合的であれば(1)は真であることになる。厳密に計算しようとした場合にはいくつか仮定が必要になるが、(27)と(28)は整合的であると言

えそうであり、(1)は真であると言えるだろう。

また、(26)から(1)は以下の前提を会話の含意として持っていると考えることが可能である。⁽¹⁰⁾

(29) <ドウリデプトオモッタ>の会話の含意

現実世界に対する話者の認識時の認識において、「当該料理がうまいと（話者が過去に）認識した」という事実が認識時における他の関連する事実群（新規情報により修正される前の既存知識）と整合的でなかった。

(29)における他の関連する事実群は(30)のようなものになるだろう。

(30) <(29)の認識時における他の関連する事実群>

- a. [(認識時の) 新規情報より]⁽¹¹⁾娘が当該の料理を作った
- b. [既存知識より]娘が当該の料理を作ったならその当該の料理はうまくない
- c. [既存知識より]うまくない料理を食べた人はその料理がうまくないと認識する

「当該料理がうまいと（話者が過去に）認識した」という認識時の事実は、(30)と整合的ではないと言えるだろう。

従って、(1)の意味と会話の含意から、(1)は全体として次のようなことを述べていると解釈できるだろう。

- (31) 「当該料理がうまい」という話者の過去の認識は、認識時には「当該料理は娘が作った」と思っていたのでこれを含む他の関連する事実群と整合的ではなかったが、発話時には新規情報により「当該料理は娘が作ったのではなく、一流シェフが作った」ことがわかり、他の関連する事実群と整合的になった。

ドウリデプトオモッタ文は納得を表すとされるが、(31)はまさに納得の一形態

であり、この文における納得とは話者の矛盾状態にあった認識が無矛盾状態になったことを表すと考えられるわけである。

4. 2. 【誤解に基づく納得用法】

以下に(3)と(25)を再掲する。

(3) (以前A口座に100,000円入金したにもかかわらず通帳を見ると1,000円と書いてあり不思議に思っていたところ、実は見ていた通帳がB口座のものであり、A口座の通帳には100,000円と書かれていることがわかったという状況で) ドウリデA口座に1,000円しかないトオモッタ。

(25) <ドウリデpトオモッタ>の意味

現実世界に対する話者の発話時の認識において、「pと（話者が過去に）認識した」という事実が他の関連する事実群（新規情報により修正された事実を含む）と整合的だ。

(25)において、「pと（話者が過去に）認識した」という事実は(32)になる。

(32) <(3)の「pと（話者が過去に）認識した」という事実>

認識時にA口座に1,000円しかないと（話者が過去に）認識した

また、新規情報が「『残高が1,000円である』と記帳されたB口座の通帳をA口座の通帳だと誤解した（誤って認識した）」であることから、他の関連する事実群は例えば(33)のようなものになるだろう。

(33) <(3)の発話時における他の関連する事実群>

a. [新規情報より]「残高が1,000円である」と記帳されたB口座の通帳をA口座の通帳だと誤って認識した⁽¹²⁾

b. [既存知識より]「残高がX円である」と記帳されたY口座の通帳をZ口座の通帳だと誤って認識したなら、「Z口座の残高はX円だ」と誤って認識

する

- c. [既存知識より]W口座の残高1,000円が予想よりもかなり少ない金額だと認識したなら、「W口座の残高は1,000円しかない」と認識する

従って、(32)が(33)と整合的であれば(3)は真であることになる。この場合も厳密に計算しようとするといくつか仮定が必要になるが、概ね(32)と(33)は整合的であると言えそうであり、(3)は真であると言えるだろう。

また、(3)は以下の前提を会話の含意として持っていると考えることが可能である。

(34) <(3)の前提としての会話の含意>

現実世界に対する話者の認識時の認識において、「A口座に1,000円しかない(話者が過去に)認識した」という事実が認識時における他の関連する事実群と整合的でなかった。

(34)における他の関連する事実群は(35)のようなものになるだろう。

(35) <(34)の認識時における他の関連する事実群>

- a. [既存知識より]A口座に100,000円入金した
b. [既存知識より]X口座にY円入金したならX口座の通帳の残高はY円以上ある
c. [既存知識より]Y円以上あるX口座の通帳の残高を見たらY円以上であると認識する

「A口座に1,000円しかない(話者が過去に)認識した」という認識時の事実は、(35)と整合的ではないと言えるだろう。

従って、(3)の意味と会話の含意から、(3)は全体として次のようなことを述べていると解釈できるだろう。

- (36) 「A口座に1,000円しかない(話者が過去に)認識した」という話者の誤っ

た過去の認識は、認識時には「A口座に100,000円入金した」と思っていたのでこれを含む認識時の他の関連する事実群と整合的ではなかったが、発話時には新規情報により「話者がB口座の通帳をA口座の通帳だと誤って認識していた」ことがわかり、これを含む発話時の他の関連する事実群と整合的になった。

この用法においても、過去の認識時には矛盾状態にあった認識が発話時に無矛盾状態になったことを表すこととなり、納得を表すこととなっていると言える。

5. まとめと今後の課題

以上、本論文ではドウリデpトオモッタ文が何を納得しているのか、また如何にして納得を表すに至るのかについて分析した。

まず、ドウリデpトオモッタは、オモッタの部分をはズダやワケダに言い換える（ただし、pの時制を変える必要がある場合もある）ことが可能なものと不可能なもの二種があること、そして前者はpの部分の話者が事実であると認識しているのに対して、後者は非事実であると認識しているという違いがあることを指摘した。そして、それぞれを【通常の納得用法】、【誤解に基づく納得用法】と名づけた。

続いて、【通常の納得用法】と【誤解に基づく納得用法】の異同について指摘した。具体的には、認識時には話者の思いに矛盾があり、その矛盾の原因が発話時に新規情報から得られるところが共通し、認識時の思い違いが「pと思わせる」ところにあったか、「pと思わせない」ところにあったかのかが相違していることを指摘した。

また、ドウリデpトオモッタは構成性の原理に基づき文全体の意味が計算されるとの立場に立ち、実際にこの文がどのような意味になるのかについての提案を行った。そして、構成性の原理によって得られた意味は、直接的には発話時の話者の認識状態を表すのみであるが、それが発話されることから認識時の話者の矛盾した認識状態が会話の含意として得られること、そして両者から話者の認識状態が矛盾した状態から無矛盾の状態に変化したことを表せていること、このこ

とが納得の実体であることを主張した。

本論文では、副詞ドウリデがトオモッタと共に使用される場合のみを分析したが、ドウリデはワケダやハズダとも使用可能であり、この場合も納得を表す。ワケダやハズダは、ドウリデと共に使用されない状況では推量を表すことが多く、推量を表せるワケダやハズダが意味的に大きく異なる納得を表せるのは不思議なことであると言えよう。ワケダとハズダがドウリデとどうして共起できるのか、この時如何にして納得を表せるのか、今後の課題としたい。

注

(1) ただし、以下のように時制に調整を加える等しなければならぬ場合もある。

(i) A: 昨日の試験、平均点が40点だったって。難しかったよね。

B: ドウリデ (難しいトオモッタ、難しかったワケダ、難しかったハズダ)。

(2) 以下では、ドウリデpトオモッタの(1)のような使い方を【通常の納得用法】、(3)のような使い方を【誤解に基づく納得用法】と呼ぶこととする。

(3) 実際、ワケダとハズダが伴われる文ではpが事実でない場合は不自然になっている。

(4) ここで少し(7)を説明する。話者が何らかの認識をする時はその根拠が通常必要であるが、根拠としては少なくとも二種考えることが可能である。一つ目は、雨が降っているのが見えたり、魚が焼ける匂いがしたり、コーヒーの味がしたり等、対象に対する感覚器官の反応状態が認識の根拠たり得る。また、既存知識も根拠たり得るだろう。例えば、「昨晚は台風が来ていた」という既存知識から「昨晚は台風が来ていた」と発話時に認識することができるのは当然のこととして、それ以外にもそこから推量して「今朝は電車が遅れる」や「電車が混む」と認識することも可能である。そして、異なる根拠から同じ認識が導かれるなら問題がないが、互いに矛盾する認識が得られる場合があり、これが(7)であるというわけである。

(5) 本論文における「話者の知識」とは、話者が真であると見做している命題のことであり、その命題が現実世界において実際に真であることは含まない。また、既存知識とは、ある判断(認識)がなされるときに、それ以前から存在する知識のことを指す。【通常の納得用法】では、既存知識の誤りが新規情報によって(発話時に)明らかにされるが、これは話者の脳内でそれまで真であると見做されていた命題が偽であると更新されたことを意味するわけであり、言うまでもないが客観的な事実が真から偽に変わったことを意味するのではない。

- (6) [[[ドウリデ]_p][トオモッタ]]の可能性も論理的にはあるが、【誤解に基づく納得用法】はこの構造では処理できない。
- (7) 本論文では、認識を、断定、推量、推定等の判断をすべて含めた概念として使用する。従って「認識した」は過去に断定、推量、推定等の判断がなされたことを表している。
- (8) (24)を少し補足する。まず、ここで言う「事実」とは客観的事実ではなく、あくまで話者が事実と認識している事柄である。人は度々事実誤認することがある。実際、前節で見たとおり、本論文で扱っているドウリデpトオモッタ文は、認識時に事実誤認をしていなければ使われないが、事実誤認をした時点での事実誤認をしている本人にとっては、その事実誤認している事柄は正に事実として認識されているわけである。(24)における「事実」はこういった事実誤認された事柄も含まれており、あくまで当該の認識がなされた時点において話者がなしている認識上の事実という意味である。また、「整合的」とは「道理」という言葉の言い換えであり、無矛盾と言い換えても構わない。
- また、他の関連する事実群とは、話者の認識Xの整合性の検証に必要な事実のことである。具体的には、Xと矛盾する事実があればその矛盾する事実はこれに含まれるし、矛盾を導出する事実があればこれも含まれる。また、逆に、Xを導出する事実があれば、それもこれに含まれる。
- (9) ここでの過去とは認識時のことをいう。
- (10) ドウリデpトオモッタ文はドウリデとオモッタにフォーカスがあり、このフォーカスが会話の含意をもたらしていると考えられる。
- (11) 例えば娘がエプロンをつけていたのを話者が見た等が新規情報として考えられる。
- (12) 現実世界に対する話者の発話時の認識において「B口座の通帳はA口座の通帳だ」という命題は事実たり得ないだろうが、過去（認識時）の認識において「B口座の通帳はA口座の通帳だ」と誤って認識したという命題は事実たり得る。発話時の自らの認識を発話時に誤っているとすることはできないが、過去の自らの認識を発話時に誤っているとすることは可能だからである。

参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

グループ・ジャマイシイ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』 くろしお出版

小山恵美子・渡辺撰 (1993) 『すぐに使える実践日本語シリーズ4広がる深まる副詞 (上級)』 専門教育出版

田窪行則 (1989) 「談話情報の管理に関する言語理論」『言語情報処理の高度化研究報告7 言語情報処理の高度化の諸問題』 pp.39-54.

南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』 大修館書店

Grice, H. P. (1975) Logic and conversation. In Cole, P & Morgan, J. (eds.), *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. Academic Press.